

れる音、かしがましい瀬戸物の濁れあふ音なぞ一時に家中に響きはじめた。

その日、與里は勤めを休む筈にしてゐた。

いつたい與里の勤先（場末の駄賃宿設備）はその伯父の経営にかかり、この伯父は與里の父には唯一人の兄弟であるが、かなり富裕な退職陸軍將校であつた。この人は、落魄した與里の一家を憐れむよりは荷厄介にしてゐたので、與里達は何事につけても遠慮深く、他人以上によそよそしい氣象を働かせて、大概の病氣にも休むことを差控へてゐた。しかし此の日は流石に與里も休む心算にしてゐたらしい。

病める與里を二階へ残して、人々は階下で賑やかな食事を稱り、揺り子ばつてから再び次ぎ次ぎに明るい二階へ集まると、やがて老妾が最後ひひとり聲もなく登つてきて、感動もない静かな顔で遙かな空に見入りながら「まあ結構なお天気……」と、言葉はさもさもさ恍惚として述べたけれども、さういふ言葉がやりきれないほど石碑のやうな顔付で、つづいて支也の方へ孔のやうな視線をきりかへ

「お支度は出来たの？ 伯父さんへ行くのですから。缺勤のお届けに、ね」

「なんだ。でも、僕としては挨拶にだけは行きたいけどー義理だからね」

「兄さんのことではないよ。僕は僕として缺勤したくないんだ。別に僕は兄さんに當てつけて言つてゐるわけぢやないんだから、僕は僕自身の立場としてー」

さう言ひかけて與里は次第に自制を失ひ、泣き出しさうに聲もうるんで裂けるやうな響きとなり

「——僕は膽が小さいからね。いたつて氣が弱くて意氣地なしなんだからね。僕はクビにされるのが怖いんだ。僕は世間並の使用人より頼りのないお情けの麗人なんだからね。伯父さんから厭々乍ら世話を見て貰つてゐる邪魔物なんだ。これが他人同志ならさう怖い筈もないだらうけど、なまじひに親戚だから——僕なんか、つまり人間以下の荷物だとか家畜みたいな生物なんだから。いつ何んとき追ふ出されても文句の言へる義理はないんだ。伯父さんはいくらでも理窟のつけられる身分だし、僕と来たひには、どんな理窟をつけられても抗辯の餘地はない。廢物なんだから。れつきとした氣遣ひだからね。クビにされたら他處で使はれる當はなし、僕はまるで、まづくらな毎日なんだから……」

と與里は激しい興奮のために胸の塞がる有様に見えた

「ああ、このままでいいかしら？——」

窓に宛れてゐた支也はにわか立上つて母と服を直氣に見廻し、次に僕へ手を差し入れて何かと衣服を調へ直すやうにしたが——するとその一寸した沈黙の中へ、與里は顔うげな顔を横にねかせたまま

「なにも一人で出掛けることはないのに——」

「この人の眼を頼むのですよ」

老妾は少しも表情を動かすことなしに、顔の向きて支也の方を指すやうにした。與里はそれを目に入れてのち又弱々しく顔を横にねかせたが、全く間髪を入れぬその瞬間に著るしく急き込むやうな氣配に見え、それを殺して破れるやうな掠れた聲を壓し殺し殺ししながら

「ちや、行つていいけど……しかし僕は、必ずしも缺勤するとは限りませんよ。氣分さへ良ければ、夕方からでも僕は出勤する心算なんだから。僕のことならおせつかいは止して貰ひたいね……」

「今日は休んだ方がいいよ。先刻はさう決めたんぢやないか。悪いことは言はないから——」

と、支也はこれも急き込んで、併しこれも語勢を壓し殺し乍らのほせたやうなうわづつた顔付をして

「俺はいいよ。俺はなにも今日職を頼まなくつてもいい」

が、つとめて冷靜に流れる聲をおさへるやうにして、併し時々おさへ切れずに金屬性の高音を噴き出し乍ら其處までを言ひ了ると、それなり死んだやうに途切れてしまつた。そしてそれは不思議なことに嗚咽に變ることもなく、ぐつたりと、布團の一部であるやうに眼蓋を閉ぢて動かなくなつた。丁度その毛髪のあたりへまで窓を流れる四角な光がとどいて、モサモサと層のやうに鈍く冷たく覆やいせられた。

「おれお別に今日行かなくつてもいいんだといふのに、よう、行かなくつてもいいんだと言つてゐるのに、俺は……」

支也はふくれて、重苦しい無言の中へ、ムツとしたがら纏繞するやうな言葉を落した。それからネチネチと横を向いて拗ねたやうに肩を張つた。さうして、

「別に君に悪いやうに計らう心算があるのぢやないし、さう悪人に考へなくともいいんぢやないかと思ふね。それ俺は家を出奔したり長い間音信不通であつたりした無頼漢でね。大した親不孝者には違ひないけれどね、ま、刑務所の御厄介にならなかつたやうなものだすね、兄弟なんかは他人より信用の出来ないものかね。さうお互に憎んだり罵しあつたりするものかね。君の哲學はさう

らしいけど、僕は別にさうひどいものだとは考へないがね。

「僕はね、兄弟なんて形式に何の値打もおかないよ。僕に必要なのは温い思ひ遣りだけなんだが。兄弟なんざ何のたしにもならないね。」

「それお君の苦勞が足りないからだね。斯う言つちや悪いけど君は夢想家で世の中のことには知らないからね。世の中に温いものなんざ凡そありやしないよ。結局形式だけだけど、血族つてもものは、その絆がいつとう確實に信頼できるんだよ。」

「さういふ目論見で僕を頼つてきたのなら出て行つて貰ひたいね。僕は港や掃溜ちやねえや。兄さんの反吐を始末するのに僕が生きてる次第ぢやないんだから。僕の家庭は神聖なものなんだ。第一發狂した癡人なんだから人に頼られる柄ぢやねえや。」

「いつ泣き出すかと思ひ乍ら、その意味でハラハラしながら歌夫は黙つてきてゐるが、奥里は併し不思議なくらゐる冷靜で——それでも身體は布團の中で幽かに顫へてゐるやうであつた。言葉をさると矢張りぐつたり眼目して、生氣の失せた無表情な顔をしてゐた。」

「困つたね——」

であつた。歌夫や老母へ走らすやうな視線を投げたが、みんなうつろな眼付をして取りあふやうには見えないので、玄也はそれにもムツと應へて顔を逸らし、今度はわざと平然として動かぬやうに努めてゐる。けれども動かぬことが一層の苦痛らしく時々ヒョイとバネ仕掛の人形のやうに動き出しさうに滑りかけて、白らけきつた表情をつくつた。

すると重苦しい無言が暫く続いたのち、流石に老婆がまづ堪へかねたものとみえ、ふと立ち上つて、玄也に向ひ

「さあ、伯父さんへ行きませうよ。お支度はいいねし、さう言ひ終ると老いた顔に殆んどむごたらしいほどの冷たい笑ひを刻ませたが、

「これが毎日のことなんだからね、ほんたうに、やりきれないわねえ。又午過ぎにはお偉い方のお天氣も變はるでせうからね。アア、アア、いやらしいこと——」

奥里は併し目を閉ぢたまま生氣のない寝顔をして、まるで何も聞えぬやうに其れには何も答へなかつた。すると玄也は、急にきつい、生眞面目な、分別くさい怒つたやうな顔付をして

「お母さんは怪しからんよ。ヨツちゃんがあんなふう

人々は各のうつろな視線を隠すやうに逸らしあつてゐたが、ひとり玄也は、餘儀なく分別らしい舌打を鳴らし、冷靜を取繕ふために標々な力を驅り立てるやうに見えたけれども、度を失つた狼狽は隠しきれず、血走つた蒼白な顔をして思はずオロオロと右往左往に視線を騒がせ乍ら、身體の重心をバラバラに崩してしまひ

「だつて僕は、だから僕は、今朝もくれぐれもお願ひしたやうに、決して君に御迷惑をかけるやうなことはしないよ——これ迄のことだつてあんなに幾重にもお詫びしたんぢやないか。それお僕の悪るかつたことだから、幾度だつてお詫びをしても構はないけど、それは済んでることぢやないか。ききわけがないぢやないか……」

「僕はなにも兄さんのお詫びがききたいわけぢやないんだ。」

「困つたね。さう頼まれたつて——僕は全く困るよ。あんまりききわけが無さすぎるよ……」

匙を投げたといふやうに玄也は諦めたやうな顔をしたが、何んとなくムツとして、立ち上つて著物の前を合せてみたり布團の上の塵を拂つたり、泣き出しさうな様子にも見えたり、また坐つてフツと空を仰いでみたり、混亂を紛らすために身體を動かさずにもるられぬといふ様子

言つてゐるのに、わざわざ風波を立てるやうな、同情のない言ひ草をするこたアないぢやありませんか」

「まアいいぢやないか。君は兎に角行つておいでよ。お母さんに逆らうことも、ないぢや、アリマセンカ——」

「うるさいよ。なにも君が口を出すこたアないぢやないか」

玄也は凄じ氣込みで歌夫をたしなめたが、歌夫はニヤニヤ笑ふばかりだし、一方奥里は矢張り無言で死んだやうに目を閉ぢたまま、玄也のために一言半句の暗示を合んだ言葉さへ興へようとはしなかつたので、玄也は再び狼狽して、ソワソワと落付かない視線を騒がせはじめた。

「だから行つといでと言ふんだよ。心配しなさんな——」と、又歌夫に彌次られて、

「ああ、ぢや——」玄也はそれをキツカケに、見るからホツとして立ち上つた。そして

「ぢや、行つて参ります。義理だからね、挨拶にだけ出ておかないと困ることがあるからね。悪くならないでおくれよ、ね……」玄也は奥里の方へさう言つたが、奥里は未だに死んだ

やうにグツタリ目してゐるのみで手應へがないから、
文也は甚だ物足りない顔をして、ウロウロと邊りを見廻
し立去りかねるやうであつたが、あきらめて歩き出した
と思ふと、今度は階段の所で振返つて、未練げな氣まづ
い表情を歌夫にあびせ

「君もどうせ出掛けるんだらう。一緒にそのへんまで行
かない?」

「俺の出掛けるにはまだ早すぎるよ」

「さう……」

文也は弱く言ひ捨て、あきらめたやうに静かに下へ
降りていつた。紅子もやがて座を立つて、文也のあとを
追ふやうに黙つて下へ降りていつた。文也夫妻が降りて
しまつた後になつても、奥里はなほも死人のやうに動か
ないので、二階に残つた歌夫と總江は窓からただわけも
なく戸外の風景を眺めてゐるが、暫くすると總江は我に
返つたやうに

「いいお天氣ねえー」と、歌夫に囁いた。

竹の葉のキラキラとした薄い緑は透きとほるやうにも
見られるし、それらの葉は無数の影を蔭ませながら縋か
に細く顫へるやうにも思はれるし、深い奥までひっそり
として、一揺れもせぬ静かな静みに考へられる時もある

「俺は、まともな働きは出来ないクチなんぞね。ま、よ
さう」

「おや、おや……」

彼はまだ未練ありげな様子であつたが、詮方なしの形
で

「おや行つてくるからね。ヨツちゃんには何分宜しく言
つといてね。君の職もきいてあげるから」

「いいんだよ、俺は。さういふ所で働くのは嫌ひなんだ
よ。君と遊んで働くなんぞ、およそ面白くないからね」

「おや、宜しく願むよ、ね」

文也は間の悪い顔の中にも苦笑ひを浮べるだけの餘裕
が出来て、少し軽快な足どりで沓脱の方へ歩いて行つ
た。そこには紅子が立つてゐたし、老婆は已に沓脱へ降
りてもう先刻から佇んだまま、どうやら材木のやうに動
きも生氣も見受けられない様子であつた。

歌夫は文也が氣の毒に思へたので、送り出してやるた
めに彼の後からブラついて行くと、併し文也は直ぐに沓
脱へ降りようとせず、そこにボンヤリ佇んで出口の方へ
目をやつてゐる紅子の傍へ寄つて、思ひがけない氣象を
した様をしながら――
「きつとうまくゆくと思ふからね。伯父さんに會へさへ

た。朝の光はうるみが深く、つやつやとして降りそそい
でくる。

すると、紅子がひとりソツと昇つてきて

「モミハラさん。ちよつと下へ来ていただけませんか?」

「うか?」

「あー」

階段を降りたところには文也が心細さうに待ち構へて
ゐて、間の悪い顔をしながら

「済まないね。先刻は失禮。あのねえ、とにかく挨拶に
だけ、行つてくるからね、済まないけれど、君からヨツ
ちゃんに宜しく言つてくれないうか。義理が悪いんだ
よ。これから先は伯父さんに頼るより仕方のない立場な
んだからね。顔を出しとかないと悪いもんだからね――」

「うん、行つてきたまへ」

「ああ、ありがと、君には済まないね。どうぞヨツちゃ
んに宜しく敬成しておくれよ、ね。済まないね……な
んなら、君も来ないか? 一緒に職を頼んであげるか
ら……」

「なんだい。俺は二階の用を頼まれたんぢやないのか?」
「だけどさ。なんなら、おいでと云ふんだよ。案外世話
をしてもらへるかも知れないから……」

すれば何んとかなるにきまつてるんだよ。待つてね。
すぐ戻つてくるから――」

紅子は、併し(これも亦意外なことであつたが――)

文也の言葉が如何にもうるさいやうにまるで取り合はう
ともしない様子で、ふと下の下駄へその目を逸らした。

それは又見様によれば、一刻も早く下駄を穿いて出て行
つてくれといふ冷淡な暗示のやうに取るこゝが出来た
し、何か一寸慌てたやうな、負けてはなるまいとしてド
キンとしながら背水の陣をとるやうな、さういふ何か突
きつめた態度にも見えた。

たちどころに文也は困惑して、寧ろ悲痛とも言ふべき
ものを表情の中に漂はしたが、すぐにそれを揉み消すや
うな又諦めめるやうな白っぽい顔付をして、動作に變に
リズムをつけ乍ら沓脱へ降りて下駄を穿いた。

「おや、行つてきます。ヨツちゃんにくれくれも宜しく
敬成してね。おや――」

文也は言つて、それから紅子に向ひ挨拶をうながすや
うな――それは寧ろ懇願とさへ見られるやうな弱々しい
態度で誘ひをかけたけれども、紅子は矢張り冷淡至極
な、生真面目な、無表情な顔付をして、それとなくよそ
見をするやうなふりをしてゐた。まともには眺めたわけ

はないが、ひどく突きつめて何か一つを思ひ込んだといふ、神經的な蒼白さをビリビリと漂はしてゐた。

玄也は度胸をすまたらしく、今度はふてぶてしい無關心を装うて戸外へ立ち去らうとしたが、戸を締めようとしかけてから矢張りまだ氣掛りであるらしく、少しソワソワしたと思ふとその拍子にもはや怵へきれずに一時にドツと弱氣になつてみじめな相貌に濁み込んでしまひ、紅子を弱々しく仰ぐやうにして、まるで拜むやうに

「……お前も一緒に來ないか。その方がきつと都合がいいよ。伯父さんと會つとけば、伯父さんもお前のことを心配してくれる手掛りを今日にももつわけだし、いろいろ心配してくれるに違ひないんだから……」

「あたしはいや——」

紅子は益々うるささうに顔を向いて呟いた。しかし玄也はなほ下手から、殆んど泪つぽいやうな卑屈な聲をし

「どうせ今後伯父さんの厄介にならなきやならないとすれば、一度は會はなきやならないんだからね、ね——」
「いいんですつたら。貴方は行つてらつしやいよ。お母さんがお待兼よ」
「だから一緒に行つた方がいいぢやないかと云ふんだ

よ、俺は——」

紅子はすつかり厭らしい表情を露骨にみせて、苦々しげな苛立ちをビリビリと浮き立たせたが、
「いいのよ。早く行きなさいつてば。安心して。あたしは別に逃げ出さないから。但し今日だけは。氣の毒だから」と輕蔑しきつた口調で叫んだ。

玄也は見る見る名狀の出來ない困惑を浮べて、どうすることも出來ない窮狀に立ち至つたやうであるが、暫くは手の施しやうもないと見えてぼんやり俯向いてしまふほかに方法もないやうだつたが、ややあつて額をあげるど、もはや駄夫のそこにあることも忘れて、見榮も外聞もかまはずに

「だからよう。今迄のことは昔から詫び通しぢやないか。だから、今後は大切なんぢやないかと言ふのに。これからなんだよう、大切なのは……」

玄也は殆んど、再び昏脱の中へもぐり込んできたいやうなチリチリした様子をした。しかし此の場の形勢では最早とうてい見込のないことを見てとると

「——いづれあとでゆつくり話をしようよ、ね、ね。すぐ歸つてくるからね。きつと伯父さんは心配してくれに違ひないんだから、もうこれからは大丈夫なんだか

ら——」

そして玄也は尙幾度となく空しく念を押して、まるでフラフラに千切れるやうな有様で、遂に戸外へ去つていつた。

駄夫はつひなんとなく壁に凭れてこれだけの光景を見了つたのである。途中から立ち去らうかと思ひつくこともなく、別に感慨を伴ふこともなく、この奇妙な光景を實に冷静に見了つてしまつたのだ。そしてさて二階へ立ち歸らうとする——

紅子は玄也の行つてしまふのを見ると、急に眞うしろを振向いて、勿論そこに駄夫の居るのを充分に意識したうへ、併しそれを全然氣にかけぬ大膽な物腰で、兩手で頭をかかへるやうにして

「アアア、くさくさしちやつた——」

鋭く張つた、蒼白な、ヒステリックな顔をして、何もない前方を険しい空虚な視線でチツと見てゐた。

思ひがけない一聯のパノラマを見了つたものである。勿論駄夫は他人のことに身を入れて思ひ入る程殊勝な男ではなかつたが、味氣無い一つの世相を見ることは、駄夫にとつて、それは、駄夫自身の生存をいささか悲しく思はせるに充分であつた。やはり朗らかな氣持にはな

れない。

二階へ來ると、總江は窓際に多次郎と坐つて遊ぶふりをしてゐたが、その落付かない様子からして、總江は今迄階下の話を立聞きに出向いてゐたのだと推察された。

總江は駄夫に二言三言白々しい言葉をかけて、それから、益々甲高くさんざめき乍ら、多次郎を相手に遊び興じはじめた。

與里は——狸寝入りであるのかも知れぬが、やはりぐつたりと瞑目して睡つた様子をしてゐた。先刻までその髪の毛にたわむれてゐた強烈な光線は少うし動いて窓の方へ寄り、與里の全身は、今は全く影の中に息づいてゐるのだ。

駄夫は暫くただ意味もなく窓外の景色を眺望してゐたが、やがて外出することにきめ、階下へ降りてきた。

下では、六疊の片隅に紅子がゐて、たつた一人何やら思ひ耽つてゐたやうであつたが、駄夫の降りるのを見て「アアア——」何やらうるささうな様子でさう言つてふと立ち上り、さあらぬ態で、寧ろ人を食つたほど空々しい素振りをしながら、かなり荒々しい聲音で二階へ昇つて行つた。

昨夜の甚だ慎しみ深い此の女は、今朝は大した變りや

うてあるけれども、さういふことは歌夫にとつても領けぬことはなかつた。

七

さういふ出来事があつてのち外出した歌夫は、この日道を行き乍ら若干の金が欲しいと考へられた。活動を覗くなり、立喰ひをしてみるなり、動物園をぶらついたり街頭の詰將棋を賭してみる等、何かしら無駄に金銭を遣ひたいと思つたのである。これ迄も同じ思ひに驅られることは屢々のことであつたが、この日は同時に實際の手段を思ひ運らしてゐるほど沁みつくやうな思ひであつた。沁むやうに思はれたのは、又、振り仰ぐ爽快な蒼空でもあつた。

竹藪の家へ厄介になりはじめたばかりの頃、まだ浅い春であつたが、一夜奥里に伴はれて、此の街外れに屋敷を出すおてん屋へ出掛けたことがあつた。その場所彼等は中年の洋服男と一座した。

その男は瘦せて陰惨で蠟燭のやうに神経質で、そのために丁度日陰の枕のやうに黒ずんでゐたが、其の胴體の一部のやうに大きな折軀を抱き込んでゐたので、これは

ぎると全てに親切である話、等々、大凡斯様な數々の豪奢を説いて寧ろ邊りに北風を潑らしたのであつた。

去りぎわに男は大型の名刺を取出して歌夫にだけ與へ（——少くとも奥里の方を勤め人に見たのであらう、この眼識には歌夫も幾分感心した。併し男は歌夫を貧困な畫家と見た形跡があつた——）

「オレの自宅は裏長屋でムサ苦しいけど、店は別に市内の方に相當なものがあるんだよ。いつも四五人の苦學生がゴロ／＼してゐるのさ。結構煙草饅くらゐにはなるからね、君も一度訪ねて來給へ」

と言ひ、尙一度「待つてゐるぜ」と念を押して、そそくさと退散してしまつた。かと思ふと急に引返して暖簾に首を突き入れ、歌夫の肩を押しからがして、

「吉原の話はおつかあにナイショだよ」

男はニヤ／＼して、「オレのおつかあは力持ちだからね」と言つてゐたが、首を引つ込めると口笛を吹き流して向ふへ歩き去るのが分つた。

歌夫はその男を思ひ浮べたのであつた。一つ煙草饅をせしめてやらうと考へたのだ。名刺は內衣袋に藏つておいたので、示された番地へ出向くことに決心した。成程店として市内の番地も示してあつたが、男の自宅は奥里

保険の外交員と一見して見受けられた。訊いてみると、併し其てはないのだつた。教杯の酒に男は忽ち赤黒くほてつた顔をして、江戸前のいなせな言葉に關西訛りのアクセントが時々絡みつくせつかちな口調で、心安く二人へ話しかけるのを聞いてみると、男は系圖屋といふ不思議な商賣を營んでゐた。ケイツ：：家代々の系圖、萬世一系の系、それあの系圖さ、と男は怪訝な顔付をした歌夫に向つて細かく説明して、近頃自分は大變長氣のいいことをムキになつて信じさせようとした。その話はどこまで信用していいものか分らないが、世間には系圖に悩む人々が澤山あつて、斯んな便利重寶な機關があつたのかと狂喜して意外な禮金を授け出す成金もあつたほどだと男は得意げに語つてきかせた。

「名前は特に隠すがね、商賣は信用だからよ、人の秘密は洩らせたいからよ——」

と男は氣持良ささうにカラ／＼哄笑して、さういふ譯だから自分の店には四五人の苦學生を使つてゐるが、それでも目の廻るほど忙しくて莫迦々しいほど儲かるのだと熱心に説明した。そして、先夜も吉原へ豪遊に出かけたとか、その日は丁度大金を所持してゐたので花魁も吃驚して店の金庫へ藏してくれたこと、娘妓も三十を過

の家から遠くなかつた。奇妙な場所に不思議な煉瓦塀があるものであつた。塀本來の性質として一方には當然固はるべき何物かがあるべき筈のものを、この豪勢な煉瓦塀は明らかに兩側が道路であつた。道路——いや、道路と呼ぶには聊か顔負けのする代物で、左右兩側の道ともにせいせい一間幅ほどの露路である——その又露路の左右が壁々として連なり流れる長屋であつた。これらの長屋は所謂貧民窟なぞと呼びならはすあの種類で、見渡す限り壁々として同じ方向へ流れて行く長い長い幾棟もの長屋であるが、みんな丈がチンチクリンで恐ろしく平らべつたいトタン葺きの平家であつた。それ故、この露路の入口に立ち止つて奥手の方を眺めると、結局高さの目立つものは何一つとして見當らず、皆一樣にブス／＼と光を燻し返してゐる低い屋根ばかりで、殊のほか空が大きくマンまるく覗かれた。

この露路は、塀の兩側ともに凡そ亂雑そのものである。各々の軒からは殆んど例外なしに煉瓦塀へ竹竿が差し渡されて、洗ひたての干物が色とりどりにブラ下げてある。その奥手には、これも一種の屑のやうに、凡そ物憂げに置いてゐる女房達が隠見してゐた。

扱て、この不可解な煉瓦塀であるが、これは結局何物

であるかといふに、これはつまり何物でもないらしい。なぜかといふに、兩側の露路は各三十間もして結局袋小路になるのであるが、その途端に、其處のドンツマリに於て此の不可解な煉瓦塀も突然途切れてしまつてゐる。結局人々は一方の露路から這入り、ドン底で別の一方へ廻り別の入口へ舞ひ戻ることによつて、當然の結果として此の物々しい煉瓦塀を一週することになるのであつた。

思ふにこの邊一帶は、昔廣茫たる原つばに建てられた工場の跡に相違ない。その工場が取り壊されて全部は片付かぬうちに安直な家が立込み、斯うして異様な煉瓦塀が取り残されたものであらう。煉瓦塀はどこどころ窪んだり崩れたりしてゐた。

系圖屋の住居は此の露路の中途にあつた。何處の長屋にも見られるやうに、系圖屋の軒下からも何やら青いものが一列に芽を出してゐた。所詮コスモスが朝顔の類ひであらう。

入口の格子戸は開け放されてあつたが、目の前に破れ障子が鎖されてあり、傷口のやうな破れ目から奥の暗がりが見えて見えた。案内を乞ふと暫く音がなかつたが、やがて喫驚するほど肥つた女がブツキラ棒に現れてき

て、肩を寄せ乍ら駄夫の顔をジロ／＼見下してゐる。威程、これは力持ちに相違ない、と駄夫は思はず可笑しくなつた。

女は胡亂な目付をして駄夫を見下してゐたが、何となく面白さうにニヤついたりしてゐる駄夫の様子に不愉快を感じたやうであつた。

「お前さんは誰？ 何の用？」

「名前は言つても始まらないんですが。御主人にお目に掛れば分るんですが——」

「とうさんは留守だよ」

無愛想にさう言つて、女は併しまだ胡散臭いといふやうな、物憂くてだらしない女の様子であつた。

「店へ行つたら會へますか？ 僕は何か働かして貰ひたいんだが……」

「知りやしない、何處へ行つたか——」

と女は五月蠅さうに横つちを向いた。駄夫もつひクラ／＼と同じ拍子に睡くなつてしまふほど五月蠅さうな調子で、駄夫は大きく胸を張つて、アンアンと背延びをした。恐らく背中には降りそそいでゐる管のポロポロした好天氣が、目の前の陰氣な暗さを厭ふやうに心持よく感ぜられてきた。ねむたいのだ。

「あん」

男は暫くボカンとして丁度駄夫の頃のあたりを凝視めてゐたが、長いことして、「まあ、おあがり——」と言つた。

一足香脱へ踏み入れたとたんから、駄夫はもう仕事を止して忽ち戸外へブラつき出たいと思ひはじめた。

戸外へ置き残してきた好天氣が莫迦に気がかりで、この屋内の薄暗さが分秒も堪へられぬものに思はれた。

仕事は果して駄夫の想像した通りだつた。男は矢張り駄夫を繪描きと見たのであつた。駄夫は道々これは枕繪ではあるまいかと考へてゐたが、事實も矢張りその通りであつた。しかし駄夫は、この時もはや全く何事もしたくない物臭にとりつかれてゐたので、變な風に白々しい

氣抜けを味はひ乍ら、先刻から立ち通しにボカンとして坐ることも忘れてゐた。駄夫は壁に凭れて、窓から見える明るさを飽かず眺めてゐたが、

「俺は繪が下手だからね。俺は繪描きではないから……」

駄夫は飽のやうな目の玉をして外の氣配に氣をとられ、今にもユラユラと蒼空の下へ泳ぎ出して行くやうに見えた。系圖屋はすっかり吞まれたやうであつた。そして幾分狼狽して一寸抱き止める恰好をしながら、

駄夫はふとある祭禮の風景を思ひ出してゐた。ボカボカした日和の中に埃っぽい露店が道の兩側に立ち並んでゐて、ユラユラ蠢いてゆく無限の雑沓を挟んでゐるが、兎に角この方は動きもせずに、睡たさうに流れる人波をやり過してゐる、といふやうな……

「ぢや、さよなら」

「……」

肥つた女は返事もしなかつた。その代り、駄夫が數居を踏み出して恍惚と好天氣を吸ひ込んでゐたら、

「おい、お前さん——」

と言つて、系圖屋が氣の弱さうな聲を駄夫の背中へかけた。なんだ、さうかと思つたが、同時に又、なんだ、分りきつたことぢやないかと言ふやうな氣もし、ただ言ひやうもなく實に睡むたげで、即座に振り向く氣持にはならなかつた。兎に角振り向いてみたら、肥つた女はもう其場所居なくて、瘦せた系圖屋がチヨロリと入れ換つてゐたのだつた。滑稽なことには、系圖屋の身體の四邊に、先刻は無かつた暗い隙間がふんだんに散らかつてゐた。そして、肥つた女が振向きもせず物臭さうに薄暗い奥へ歩いて行く姿が見えた。

「先日おでん屋で逢つた者ですが——」

「筆は立つだらう？ え、お前さん？——」と早口に訊いた。

歌夫は兎に角「うん」と答へたのである。そして兎も角も坐り——今日は兎も角も坐るよりほかに仕方がない、ここで働かないとしても、兎も角一應は坐つてみて考へてみて……と言ふ風にその時は思ひつかれたのである。併し結局は厭々ながら兎も角も仕事をしてみよう心算でもあつた。そして歌夫は兎も角も坐つたのである。

男は歌夫の身の上なぞを嫌々なふうに訊いてみたが、氣の抜けた生返事をするばかりでろくすつば言葉らしい口のきき方もしないので、あきらめて仕事の話を簡単に運んだ。歌夫は早速後悔したが、とにかく夕刻までに短い物語を一つ仕上げる約束をした。戸外へ置き残してきた麗かな日和が、もはや生涯取り返しのつかぬ損のやうに奪まれてならなかつた。好日。この麗かな好日を——歌夫の胸には忌々しい思ひがなかなか収まらうとしなかつた。

男は格子窓の下へ、この家にただ一ヶ所の日當りの良い場所へ、小さな机を持ち出して紙とペンを用意してくれた。其處からは例の露路が、従つて奇妙な癖が鼻先に見えるのである。空。言はうやうもない露かさてある。

豆腐屋が喇叭を吹き乍ら歩いてきたが、丁度この邊が中程なので、すぐ鼻先の襟際へ荷を下し、右と左へ交互に向けて喇叭を吹きかけてゐる。なかなか買ひ手が出ないので退屈してしまひ、變な風に吹き延したりチヨン切つたりして様々な風に吹き鳴らしてゐるが、今度はボカソとして鼻に免れ空へ向つて鼻頭をやうに吹き初めた。そして間もなく行つてしまつた。

すぐ窓の左手には斜に立てかけられた張板が半分くらゐ見えるのである。時々その上を大きな手が走るのだが、手の持主は滅多に顔が見えなくて、やうやく見えたのは好人物らしい老婆であつた。その人は歌夫を見ないふりをして遠慮深く目を逸らしてしまつた。あちらに、こちらに、かしがましい女の語聲が轉つてゐる。

男が仕事に立ち去つてから、机の上では鋭い陽射しはかなり左へ廻つていつた。そして、光澤のある朝の光が疲れたやうな鈍さにかわつて、午後になつてしまつた。露路の氣配はめつきり淋れて活氣に乏しくなつたが、その佻びしさへ照りつける覆れた光が厭らしく堪へ難いものに思はれた。

肥つた女はブラリと出て行つたが、暫くしてから同年配の二人の女房を連れてきた。これがみんな大變なおし

莫迦々々しいほど當然に、足駄の曲入れ屋が鼓を鳴らし通りすぎた。もう仕方がないと歌夫は観念した。

「オレは仕事に出るからね、済んだら、おかみさんからお積を買つてくん。煙草鏡くらゐは出すだらうからね……」

男は歌夫の耳もとへ斯う囁いて、茶ぶ蓋の方へと返した。彼等はこれから食事をしようといふのである。もう午に近い。七ツくらゐ、三ツくらゐ、二人の男の子供がゐて、大きい方は部屋の方でやけに喇叭を吹き鳴らして五月囃いのである。

三十分とたたぬうちに書き上げてやらうと歌夫は考へた。併し、やり出してみると思ふやうに捗らなかつた。矢張り凝るのである。平賀源内の源平梅合殿だとか種彦の作だとか、その方面の名作を何分にも耽溺した覚えがあるの、矢張り一種の氣品を興へたい欲望に支配されるのであつた。

面倒臭くなつて、筆を投げ出して了つた。

男は口をモガモガやり乍らやつてきて覗いてみたが白紙なので、かへつて自分の方で恐縮して悪いものを見たやうな様子であつたが、又展つて行つて飯を食ひおはると、お茶と一皿のおしんこを持つて来てくれた。

やべりであつた。新來の女房達はお互に特殊な訛があつて、散彈のやうな響のなかに樂器を引振くやうな耳につく音がまじるのである。

女房達は時々わざと歌夫を氣にした。話が途切れると「おや」とか、「まあ」とか言ふふうに、それ相當な身振をして頭を縮めてみたりしながら、わざと大要望に歌夫を氣にするフリをする。そのわざとらしさが無反省で、いつまでも性懲りもなく同じことを繰り返すので、阿呆らしく參るのである。ところが肥つた女は歌夫に侮蔑を感じて紙めきつてゐるものだから、その都度「ふん」とか、なんたい青二才めといふやうに、何かしら歌夫へ對する輕蔑を仄めかしてみせるのである。

昔、もう數年前のことであるが、歌夫は矢張り袋小路のとある長屋に住んでゐたことがあつた。その長屋では、ドンツマリに住んでゐた矢張り肥つた婆さんが勤進元で、長屋一帯に笑ひ本の貸借が流行を極めたものであつた。長屋の人々はそれだけが一日の楽しみやうに、ひところ此の流行で持ちきりであつた。流石に勤進元の婆さんは藏書の數でも大關で數十冊とあり、運轉する書籍の大部分は此處から出てゐたが、結局婆さんは借金で首の廻らないことになり、藏書を賣り拂つてしまひ、界

限はとみに淋しい思ひをしたりした。「あたしやウメボシだからね、こんな本は惜しいとも何とも思やしないけど——」と婆さんは長屋中にふれ歩いて買ひ手を探したものであつたが、何分にも言ひ値が方途もなく高すぎた長屋うちには買ひ手がつかなくつた。お隣の娘なんざ顔を眞赤にして喰ひつくやうに讀んでたんぢやないか、へそくりで一冊でも買ふがいいや」と婆あは憎まれ口を叩いてゐたが、一番買ひたさうだつた一組の若夫婦、これが界限で最もむさぼり讀んだ口だが、やはり貧乏で買へなかつた。この亭主はその後自作の物語を書きあげて長屋一帯へ廻してゐたが、なかなか名作が多かつた。

婆さんの藏書は、結局歌夫の手でそっくり或る古本屋へ處分した。途方もない安値であつたので、自分勝手の高相場で近隣へ賣り歩いてゐた婆さん故とても承知すまいと思つてゐたら、一も二もなく賣つてしまひ、數日経て、なほ愚痴らしい愚痴さへ零さなかつた。よほど金に困つてゐたのか、人の悪い婆あのこと故、初めから相場を知りぬいてゐて、若者の好色を嘗込んで一儲けの魂膽であつたのかも知れない。

歌夫が仕事を了へた時分、露路の中には子供の數がふえてきた。追つかけたり追はれたりして目の前をバラバ

ラ走り過ぎて行くと、煉瓦塀の向ふ側でも同じやうな物音がしてゐる。塀の上へヒョイと猫が現れて裏面に悠々と歩いて行つたが、向ふの方で今度は屋根へ飛び移つたのか、白っぽい奴が屋根を斜に通つて行つた。本通りの方で、砂利車から砂利を落す騒がしい響きもきこえてくる。

物語は原稿紙にして七八枚のものであらう。書き出してみると別に讀むこともなく氣輕に書き置ることが出来た。歌夫はボンヤリ外を眺めて、おしやべり達の歸るまで待つてゐたのである。

四時が鳴ると二人の女は立ち去つた。歌夫は早速立ち上り、肥つた女に原稿を渡した。女は口を「へ」の字に曲げ横柄な面魂をして、べらべらとめくつてゐたが、「ふうん」と言ひ乍ら愛嬌のない顔をあげ、歌夫を壓倒するためのやうな冷笑を浮べて、

「インチキな代物ぢやあるまいね——」
と意地の悪い目付をして歌夫を凝視してゐる。さては先生字が讀めないのだなと歌夫は即座に悟つたので可笑しくなり、横を向いたなり唯黙つてニヤニヤしてゐたら、果して歌夫の豫想した通り、鼻つ柱を叩き折られる思ひのした女は、腹の立つのを無理に押へて誤魔化し乍

ら威嚇をつけた聲を張つて、

「イカサマ物ぢやあるまいね」

「いつべん讀んでごらん」

肥つた女は餘儀なく一寸めくる眞似ごとをしてゐたが、急にアツサリと投げ出して、帯の間から裏口を取り出し、十錢玉を三つ疊の上へ轉がした。

「とうさんが留守だから、あたしには分らないから。今日はこれだけ取つときな。あしたでも又來てみるさ——」

露路へ出てみると、もうかなり横殴りの陽射して、長屋一帯は腰から上にだけ鈍い光が籠いてゐた。干物はあらかた取り入れられてゐたので、妙に景色がうらぶれた變りやうをしてゐる。丁度露路を出はづれる所に紙芝居が來て、煉瓦塀の下には大勢の子供達がウロウロしてゐた。果して本通りには馬に牽かれた砂利車がつながれてあつた。

どうにも仕様のない時に自分も何とか爲なければならぬまいと思ひつかれる時は惨めなものである。全くどうしやうも無いからである。そして結局どうする氣持にもならないではないか！ 急ぐだけが遣り切れないことだから急かないことが何よりだけれど、矢張りソワソワと急かされるのでホトホト困却してしまふのだ。

深呼吸でもして黄昏の空の模様を眺めるか、疾走する何かの横腹でも見るよりほかに仕方があるまい。慌ててみても始まらないことだから、さういふ時はなるべくボカンとして、他人の身の上を相談されてゐるやうな他處々々しい間拔面をすることである。

歌夫は道々案じた擧句、金三十錢は遠大なばかりごとくに用ひてやれと考へを變へた。今日はこのまま家へ歸り、明日はこの金を電車賃として古い友達を訪ねてみようと思つたのだ。それらの一人へ又暫くの厄介を頼んでみようと思つたのである。さういふ心當りが二三人はあるのであつた。

これの一つ仕送げてやらうと思ひ込んだものがないので、眞面目に落膽する氣持にはなれない。自分の境遇が惨めであるといふ實感はまだなくて、何も期待がないものだから、行き詰つたといふ暗い氣持につくづく脅やかされるといふ事も稀だ。行く手は寧ろモヤモヤして、他人事のやうに自分の明日を客觀し、委せつばなしにしたやうな氣樂さもないことはない。乞食の心境であるかも知れない。まるで肉體の一部のやうに、空氣のやうな氣樂さが附纏うてゐるのであつた。

竹藪の家では、人々はおのがじし長い間忘れてゐた自分のことを考へてみようと思ひ、俄かに機々なことを思ひ出さうとする様子に見えた。さういふ精神の状態にあつて、人々は決してしつかりした一つのものを探し當てることは出来ない。結局遠い思ひ出をほじくるやうに取り止めもない前後左右を瞥見して、自分の居場所さへ分らなくなるやうな心細さに襲はれてしまふ。人々は全ての力を落したやうにボンヤリして、それとそれと蒼白い探案を持って餘してゐるのであつた。

この状態を竹藪の家へ齎らすためには、これまでの出来事が最も高潮した一夜——（それは歌夫が系圖屋を訪れて歸宅した夜であつたが——）その一夜の終曲に似た騒がしさを必要とした。そして一つの出来事が幕を下したのであつた。人々は夢の向ふに自分の國があるやうな、そしてどうやら手の届かない遠い所で、錯雜した絲のやうにそれぞれ自分の意志が當もなく駆けめぐつてゐるやうな、困つた焦燥を感じ、當惑してボンヤリしてしまふ。俄かに氣がついて身の周圍を見廻してゐる

こと等を訴へたのであつた。

はじめに歌夫は之は芝居かと思つたのである。さう思はれて仕方のないほど文也の動作は誇張されて新派めくものがあつたし、その科白は大袈裟な抑揚をつけた下手な舞臺にまぎれもなかつた。併し人は斯う莫迦々々しく僞りの泪も出まい。それ故歌夫は暫くして文也は少し頭の具合がどうかしたのではないかと思ひ、足元に凝んでゐる奥の顔を窺ふと、彼は併し別の方の壁を眺め、それはただ激しい憔悴を浮べた普通の顔付でしかなかつた。歌夫もそこで落付を取り戻し、それでは之はどういふ意味になるのであらうと思ひ乍ら、結局ただそのまゝに文也を泣かせておいた。間もなく文也は歌夫の胸から急に泣顔を振離し、部屋の中を襪のやうに歩きはじめたのであつた。その動きは全てにリズムを踏んでゐる矢張り新派悲劇であつたが、彼は又「俺の人生はまつくらだ！」と、その意味の同じ文句を恰も虚空へ打ち込むやうに呟くのが、矢張り芝居の格法に適つてゐた。併しそれはワザとするのではないやうであつた。とかく誇張がワザとらしく鼻につくものの、生の感情は買物でなく、無意識に誇張した表現をとるよりほかに方法を知らないのかも知れなかつた。その昔、之に似た舞臺を見たのか

と、それがみんな手探りも出来ない無色無臭の中央であつたりする。そして人々は、こんぐらがつた無数の中に、何かこの一つの物だけが必要であるし、その一つだけを突き止めてみなければならぬと焦るやうな苛立たしさに襲はれるのであつた。併し歌夫は、必ずしもそのために動搖を感じることはなかつた。後刻の感慨は兎も角として、その時は睡ぶたい欠伸を噛み殺し乍ら、ただ冷然に全ての出来事を見過しただけであつた。

その一日、文也は猫の顔付をしてゐた。怒つた猫の顔付であつた。

歌夫が歸宅して二階へ登つた時に、奥の枕頭にある文也は猫の顔付をツと持ち上げて、餘り唐突な激しい意志のために、瞬間クラクラと仰返るやうなハズミをつけながら、次の時には突然歌夫の胸に顔を押して歌夫の胸まではどういふ風変わりなすばらしい動作をして歌夫の胸まで馳せ寄つたであらう？——逆はするやうな叫びをあげて文也は泣き出してゐた。そして暫くの慟哭が續いたのち、辛くもシラブルをまとめることが出来るやうになる。自分はその朝の訪問にただ侮辱だけを伯父へ報はれたこと、のみならず氣を喪ふほど打擲されたこと、自分の人生はもう暗闇で立直る見込さへ失はれてしまつた

も知れない。

「俺の未來はくらやみだ——」

彼は尙この同じ文句を一つ覚えにして、部屋中へ潰れ込むやうに呟き呟き、そして又「今度といふ今度こそは眞人間になるつもりだつたのに、俺が今日にも殺人を犯したつて、どういふことなれ、俺の罪ぢやあないんだから——」壁の前で立ち止り壁を舐めるほどにして一くさり科白を述べると、又振り向いて熊のやうに歩きまわるのであつた。

「君の伯父さんが地球の元締ではあるまいし、さう暗がるには當らない。ま、靜かに考へ直すことだね——」

これは歌夫の悪癖で、故意にするわけではないが自然と冷かすやうな語調を帯びて斯うなだめると、併し文也は大眞面目で、

「イヤ、俺はほかに手段がないんだ。俺は伯父さんに助けてもらうほかに何うすることも知らないやくざな、だらしな人間なんだ……」

彼は又大きく演説するやうに斯う述べて、直ぐ振り向いて又歩きはじめた。

「俺はもう生きてゐられない……」
「ぢやあ、オダブツか」

「モミハラ！」

「女也は絶叫したかと思ふと突然一跳びに、歌夫が轉けてしまふほど其の胸に縋りついて、

「俺を助けてくれ！俺はどうしやう、俺の力になつてくれ——」

歌夫はだらしなくゴロゴロ轉けて餘儀なく天井を仰ぎ、「ウムウム」と唸つてゐたが、いつたい此奴はまるで子供なのだらうか、それとも、スレツカラシの遊び人にも斯うした幼稚さは失せないものであるのかと、甚だ判断に迷つたのである。

暫くして、歌夫は兎に角起き上らうとして、女也の手を靜かに振り放さずやうにし、起き上る氣勢を見せた。そこで女也は自分から身を引くやうにして歌夫を起き上らせたが、自分は暫く心棒をなくしたやうな據り所ない様子をしてゐた。と、今度は急に向きを變へて與里の寢床へ身を投げて、

「ヨツちゃん——」

彼は又子供のやうに泣きはじめた。

「俺を助けておくれ。お前の運命も悲惨だけど、俺も惨めなんだよ——」

「いいよ、いいよ、兄さん。力を出しなさい。お互に力

ある。何百といふ雀の群小塊まり乍ら竹藪の中へ轉がり落ちる。その場所は一坪ばかり、波のやうに竹藪も亦騒いでゐる。靜かな夜の前觸れてあつた。

その日、寢ようとする時刻になつて、又斯ういふ出来事もあつた。もう、夜はよほど更けてゐた。

「海岸へ行つてみたいと、僕はよくシミジミ思ふんだが——」

その頃、與里はもう階下にゐたし、女也と紅子は入れ違ひに二階で睡むる支度をしてゐた。かなり元氣は恢復したものの、まだ時々目を閉ちて、クラクラする眩暈を辨へるやうな恰好をしなければならぬ與里は、壁に凭れて腕組みをしてゐる歌夫に溫和な眼差を向けて、斯ういふ述懐を淡々と述べた。

「——もう僕の一生に海を見る機会がないやうな思ひがして淋しい。さしあつて死ぬことを考へてゐない時でも、時々さういふ淋びしい思ひに驅られるのだ。斯んなにガツ／＼と働き、惨めな生き方をして、それが何て幸福なのだと思ふよりは、もう僕の生涯に海を見る機会はないだらうといふ風に、別な抒情的な匂ひを持たせて同じ佗びしさに溺れようとするらしい。結局、何なりとも

を出して助け合はうね

與里は靜かな透きとほる聲でさう言つた。その顔には何の感情も見出せず、朝のやうな穏やかさのみ浮んでゐたが、一片の冗談も挿めない眞面目さが歌夫を打つた。女也の奇矯な言動には何の果はされるところなく、純眞にその嘆きのみを聞いてゐる寛大な心が見えたのである。

そして與里は、棒ほどもない瘦腕を蒲團の中から抜き出して、まるで子供をあやすやうに、靜かに女也の頭を摩りはじめたのであつた。それは初めギョチなく、取つて附けたもののやうに奇妙なしぐさに見えた。見てゐると、併し與里は何時までもその手を止めやうとせず靜かに女也の髪の毛を摩つてゐるし、女也は又顔を伏せて身動きもせず安らかに泣いてゐるので、そしてそれは、もはや全く奇妙なものには見えなくなつてゐた。さうしてゐて、體で靜かな、何か甚だ落付いたものが與里の眼蓋に浮き上り、細く流れて行くのが見えた。與里は併し夜のやうにひつそりとして、その時も矢張り靜かな無表情のままであつた。

歌夫は困つて氣疎い面魂をして、詮方なしに夕映えのする竹藪の景色を眺めた。夕方、竹藪は雀の晝入れ時

して生きてゐたいから、斯んな風に色をつけて感傷的な佗びしさに溺れようとするのだらうね。僕のやうに死にたくない奴は——これは、ずる分、強い執着だね。妄執といふ奴だらうね……」

そして與里は、チラチラ光る薄い蒼空を思はせるやうな、やはりチラチラとした爽やかな響きをたてて、わりに愉しげに笑ふのであつた。

少年の頃、激しい熱に苦しめられた思ひ出の中に、歌夫は頻りに海の幻を見た一日があつたやうに思ひ出された。水は人の心を廣く安らかにするものらしい。水は寛大で又豊かだ。全ての憧れや全ての疲れや、果しない彷徨に蒼ざめて航路を見失うた心の歸る處であるのだらうか。水は一つの故里であるかも知れない。水は悠々として永遠に流れ、永遠に歸り——その渺々たる水面に靜かな陰を落すであらう漂泊の雲と共に、我々に永遠を感じさせる貴重な一つであるかも知れない。その果にもはや國は無いやうな心細さの湧いてくるとき、周圍には無限の無のみ感ぜられて身に觸れる何の個體も想像を許さぬ絶望のとき、併し水はそれ本來の性質として常に温い愛情を人に與へ、他の何物に由つても醫し難い冷酷な孤獨を慰めて呉れるのであらう。人はその苦しみの日に、洋

きたる水を、又潺湲たる流れを眺めることに由つて和やかな休止にひたり得るであらう。

奥里は間もなく目を閉じた。そしてその目を開けようとせず、「よく晴れた日の海を見たいと思つてゐるが……」彼はもう半ば睡つてゐるらしい、抑揚もないゴモゴモとした吐きを洩した。駄夫は壁に凭れて胸を組み、さて奥里の顔や汚點の浮いた障子等を眺め廻して、遠い場所に騒いでゐる有るか無いかの物思ひに捲込まれたいと思つた。決して耳には聞えない夜のざわめきが聞えてゐる。

斯うしてゐて、駄夫は併し幽かな吐きを聞いた。それはゴトゴトとして書の扉に似た音であつたが、部屋は何處から、或ひは戸外の何處からか聞えてくるやうに考へることが出来た。併しそれは聞き馴れた物音でもあつたので、直ちに老婆の祈りであると思ひ當ることができた。老婆は已に臥所にゐて、俯伏した顔を枕に壓し當てたまま、その全身も丁度其儘すだく昆蟲であるやうに低い吐きを洩してゐた。

この老婦人は基督教の信者であつた。とは言へ、此頃は教會へ通ふことも絶えてなく、日常も神の名を會話に雜へることさへなかつた。まるで宗教を忘れたやうな晩

總江は子供のやうな笑ひを顔やかせて暫くのうち一つ所を凝視してゐたが、纏て再び目を下して仕事を續けはじめた。そして又幾針もせぬうちに吻つと手を休めて、膝もとに寝込んでゐる多次郎の蒲團を掛け直したりした。廣い田圃に夜が落ちると、ひっそりとした沈黙の、音のない區がしさがきこえるのであつた。それを我々は夜の何處から響く音とも答へられない。ただ我々は、苦痛も喜びも憎悪も、それらを決して區別することなしに、全てを願ひたい寛大な氣持になるのであつた。

此家は廣い畑の中に孤立した二軒長屋で、壁一重向ふ側には隣家も續いてゐるのだが、長いこと借り人がなくして疊には古い埃がつもつてゐる。長いこと隣家の物音はないのであつた。いつぞや、空家の孤獨に浸り乍ら諍かな聲を食らうと思ひ、埃の中へ踏み込んでみたのであるが、空洞な部屋々々に立ち籠めた重い澱みは人の生氣とそぐはない廢墟のやうな過去の死臭に満ちてゐて、睡むる氣持にはなれなかつた。もう二年越空家のままであるのだといふ。疊は何となく浮腫んでゐるやうな不氣味さで、抜く足にべとべとと抜き残るやうであつた。駄夫は二階へ昇つてきて、煤けた壁へ貼り残された一枚の半紙を發見した。「風薫る春に名残の一夜かな。引越の前

年であるが、中年の頃は家族の誰にも秘密にして教會へ通ふやうになつたといふ、その一頃は熱烈な狂信者であつたらしい。近年はただ稀に、わけの分らぬ獨り言を吐くやうに、それも甚だ時ならぬ時に、祈りを吐くことがあつた。熱もなく、まるで心もないやうな冷淡さで、併し祈りはかなり長く續くこともあるのであつた。ある時は又數秒にしてふと止むことも稀ではなかつた。結局は遠い車輪の音のやうで、言葉らしい文句は殆んど耳に這入りはしない。奥里はもう本當に寝たのであらうか？

總江は自分の寢床の上へ坐り、まだ籠物の手を動かしてゐたが、その時ふと手を休め、仕事のために幾らか上氣して淡くほつた額をあげて、次のやうに無意味な言葉を駄夫に洩した。
「——もう梅雨だねえ。それから又暑い季節が来るし……」
「さうだね。もう纏て六月が来るね——」
「この家は、それでも夏はわりかた涼しくて浸きいいよ。畑の風が良く通るからね。あたいは梅雨が大嫌ひさ。いつまでも今の陽氣だと、貧乏はしても本當に助かるんだけど……」

夜」と書きしるしてあつた。多感な學生でも此部屋にゐて、見も知らない次の住人を讀者に豫想し乍ら詩藻を傾けたものか。駄夫はそれを引割がすには多少殘酷な氣持もしたが、傷めないやうに剣ぎ取つて持ち歸つた。奥里は怪訝な顔をして紙を眺めてゐた。
「斯んなものを書きさうな人はたしか住んでゐなかつたと思ふが。……隣には鼻髭を蓄へた中年の人物が奥さんと二人で住んでゐてね、斯んなものを作りさうな人達ぢやなかつたね——」

「さうさう。あの人は大變お髭を大切にしているたよ。立派な體格で陸軍大將のやうだつたね。無口で挨拶もろくすつば出来ないほどにはにかみやだつたけど……」
併し又暫くしてから、あゝした人柄は却つて案外斯ういふことをやりがちなセンチメンタルなところを持つてゐるのかも知れないと一同は噂した。「さう言はれてみると思ひ當るところもあるやうだね。どうも滑稽で可笑しくなるが、成程、これは案外鼻髭の仕業に違ひない」と奥里も可笑しがつた。その鼻髭は大きな建物に備くエレベニアアの運轉手であつたさうだ。薄暗い四角な箱に乗つて昇降する其人物は、鼻髭そのもののやうに嚴肅で滅多に笑ふこともなかつたであらう。それは明白な滑稽

味を痛びて、歌夫の目に歴々として映るやうであつた。
「近頃はエレベエターも大抵女の運轉手に代つたから、
鼻鏡は首を切られたに相違ない」

と歌夫もふざけて、一同大笑ひに笑ひ出したりした。
人も見知らない一人の人（それは肉體をさへ具へない
數字のやうなものであるのに——）それも永遠に相知る
ことは不可能である一人の人の人を對象として、詩を殘した
り、その存在を記念したい欲望にかられたりする。愚か
な儂ないことであるが、ひとときは、それはそれで心の
なごむ時があらう。その鼻鏡は、住みなれたエレベエタ
アに秀れた一句を貼り残せぬことを千歳の恨みとしたか
も知れない。

上の物音も絶えてしまつた。歌夫は音のしないやうに
立ち上り、自分も寝るために二階へ昇つた。
併し歌夫の豫想に反して二人の男女はまだ寝まらずに
たばかりでなく、寢床の上へ向き合ひに坐り、頗りに何
事か言ひ争つてゐた。

彼等は出来るだけ聲を殺してゐたので、しぜん顔の表
情も壓し潰されて面のやうに白々しく見えたが、それだ
けに凄味のある、ひきつつかつた顔を向け合せてゐた。彼等
は歌夫の登場にも振向く餘裕は持たなかつたし、歌夫の
とは訝らなかつた。いや、無論氣附いてはゐたであら
うが、強ひて訝がる氣持にはなれなかつた。甚だ物臭な
睡魔がもう彼に襲ひかかつてゐたから、そして暫く快
静寂に浸つてのち、さつき階段を駆け降りた踏み抜くや
うな登音や、蹴仆すやうに開けられた戸、下の夜道を走
つてゆく羽搏きのやうな登音等、一まとめに思ひ出して
ゐた。

この荒々しい出来事が再び静かな夜に吞まれて、家
も道にも嚴しい静寂が戻つてくると、やがて下では戸口
へソツと立ち下りて戸外を窺ふ人の氣配がした。それは
勿論總江であらう。道の上まで下りたやうだが、其處に
は併し夜道のほかに何事もなかつたやうだ。總江は部屋
へ戻つてきて、それから、下ではヒソヒソとざわめく物
音が湧きはじめた。奥里も老婆も目を覺してゐるらし
い。すると今度は階段を昇る登音がして、二階の唐紙が
靜かに少し開けられたが、

「歌夫さん、どうしたの？ いつたい？……」
「……」
「もうねたの？ 歌夫さん？……」
總江は暫くその場所に佇んでゐた様子であるが、諦め
て降りて行つた。

登場を意識して多少の居住ひを取繕ふほどのわづかの羞
恥も持つ氣持にはならないやうであつた。

歌夫はひたすら休息のみを欲してゐたので、わざと素
知らぬふりをして直ぐさま蒲團を被つた。そして自分の
出現によつて二人の争論も今宵はこれなり終るであらう
と豫想した。そして自分は睡る瞬間のバノラマに靜かな
海に暮れかかる大きな黄昏を覗きたいと欲した。併し全
ては誤算であつた。

間もなく歌夫は、寧ろ次第に強められる叫喚をきかな
ければならなかつた。そして豫想とは反對に、結局自分
の登場によつてもはや何物をも隠す必要のない彼等は、
あらゆる狂態をつくして争ふことになるであらうと理解
しなければならなかつた。そして實際數分のうちに、直
ぐ頭の近くまで亂れた激しい登音を聞くやうになつた。
時々進するやうな涙聲も聞えたが、概して彼等は息を殺
して掴み合つてゐるやうであつた。

歌夫は決して留めようとする氣持にはならなかつた。
願ふところは、阿呆のやうにだらしなく睡りたい一念の
みであつた。そして彼は紛れもなく、彼自身は遠い船路
のマドロスのやうに、靜かな海を眺めはじめた。そ
うして身の周圍が急にひっそり靜まつたことを暫くそれ

「あの人、もうねてしまつたよ」そして又、
「吞氣だつたらありやしないよ、あの人は……」と笑ふ
聲がきこえた。

すると又、ヒソヒソとざわめく音が下に起つた。それ
も又ふつたりと潰れてしまつて、本當に物憂い夜が戻つ
てきた。そして丁度その頃を境にして、歌夫は深い睡眠
に落ちようとしてゐた。

翌日歌夫が目覺した時分には（その日もボカボカし
た好天氣で——）玄也はとつと外出したあとであつた。
あの時以來紅子は歸らなかつたといふ。玄也は一人で
戻つてきて、それからの二三時間はねむられぬ様子であ
つたが、今朝は昨夜の睡眠不足も手傳つてよけい變な顔
付をしてゐたさうである。ひどい不機嫌で「おい、おか
みさん、朝飯を早くなのむよ」と横柄なことを言つて嘸
みつくやうな調子であつたが、至極苛々して出掛けたさ
うだ。紅子を探しに出掛けたらしい。

「ほんたうに變な具合で、なんだか皆んな真逆々々しい
やうだね……」
玄也夫妻の噂をはじめると、總江はどうしても包みき
れずに空騒ぎのやうなハシヤギやうをして、大變坐りの

不確かな落付かない風をし乍ら、喋つたり笑つたり又間の抜けた顔をしたり、といふ有様であつた。

「勿論先方も大莫迦だらうけどさ、何んだか此方も莫迦にされてゐるやうだし、又ほんとに莫迦のやうな氣持もして變だねえ。斯うビシヤリと障子を閉めて向ふへ誰かに行つちまはれたやうな、なんだか變な具合さ。」

他人の不幸に斯う好機嫌では濟まないといふ反省も見えたが、如何にも痛快で肩の下りた心持を隠しきれずにあるやうであつた。妙にハシヤギすぎて、ふと氣が附いて控へてみたりするものの、そのうちには控へることも億劫になり、殊更てれかくしに空騒ぎの輪をかけたたりした。そして、

「だいたい兄弟の不幸な出來事ですからね。お前さんは赤の他人だからそれは嬉しいことでせうけど、與里の手前少しは控へるものですよ。」

と老婆に鋭い皮肉を浴せられたりした。そのくせ老婆は又老婆で、例の表情の死んだ顔に神経質な眉だけを險しく寄せて、

「厭らしい女ねえ。あれは淫賣よ。あんな女にひつかかる女も本當に見込のないやくざ者ねえ。あたしの子供つたら厭な奴ばかり。目も當てられやしない……」

とはあるまいけど……」

と話の途中の歌夫に向つていきなり憎々しげな皮肉を浴せてゐるかと思ふと、急に又、

「おい、一杯呑みに行かうか。お前はいい奴だよ。」

とお世辭を使つて、「うるさい奴だ、勝手に一人で呑んでこい」と怒鳴られると、「ぢやあ行つてくる……」

と一應は立ち上りかけたが、また何時の間にやら坐り込んで人の會話へ時たま皮肉を吐いてゐた。

與里は夜更けて歸宅した。もとより本復はしてゐないが、人々が考へてゐたほど劇しい疲勞もしてゐなかつた。勿論元氣はなかつたので、與里はあまり口數をききたがらずに直ぐと寢床へもぐり込んだ。與里が歸ると玄也の様子は又變つた。

人々は蒲團を敷いたりするために急に會話の口を噤んで立ち上らねばならなかつたので、ざわざわした落付のない空氣がだしぬけに流れ込んできた。すると玄也も立ち上つて、その時から急にそわそわはじめたのであつた。

「俺のワイフは何處へ行つたか分らなくなつたよ——」
與里が寢てしまふと、玄也はその枕もとにまだ坐り忘れて佇んだまま、急に力のない聲で訴へるやうに呟いた。

と憎たらしさうに呟いてゐたが、急に歌夫の方を向いて、「ねえモミヘラさん、四年前に大變コレラが流行りましたわねえ。あたしあの時お魚を食べればよかつた——」と奇妙なことを言つたりしてゐる。如何にも苛々して、何物にでも落み付きさうな鋭い神經をむき出しにしてゐた。總江は氣持がハシヤいであるので却つて良く控へ、それに絡まれることはなかつたが、與里はその朝不機嫌であつた。そして老婆と劇しく言ひ争ひ、この朝も泣きほろめいて仕事に出掛けて行つた。

その夜も玄也は一人で歸つて來た。昨日來の血走つた目付が今日はふてぶてしく坐つて、殊に苛々した様子であつた。人にも餘り話しかけず、昨日のやうに芝居もどきで歩き廻りもせず、下の六疊に腕を組んで坐つてゐたが、時々嘔んで吐き棄てるやうに人々の會話へ皮肉な冗談をまぜつ返してみたり、冷やかすやうに「ふん」と言つて肩を聳やかし乍らソツボを向いたりして、自分は會話の中へ溶けようとしなかつた。そして時々人々の話の腰を折るやうに、「おかみさん、お茶をくんな」と大きなことを言つたりして威張り返つてゐた。

「お前もいよいよ加減下手な小説は見切をつけて服袴にでもなんな。どうせ何をやつたつて、お前ぢやあ埒のあくこ

「今日一日黙したの？……」

「うん。心當りには何處にも手掛りがないんだ——」

そして急にシヨボシヨボしたかと思ふと、又だしぬけに與里の蒲團へ走つて行つて、その胸に當る場所へ顔を伏せて大きな聲で泣きはじめた。至ては又芝居もどきであつた。

「俺は全く破滅だよ。ヨツちゃん。俺はいよいよどうしていいか分らなくなつた。俺を助けておくれよ。俺はまつくらだ……」

そしてヒイヒイといふ響をたてて泣き咽び乍ら身體をガクガクと波打たせた。

「俺は世界で一番愛してゐた女にも棄てられたんだ……」

「兄さん、これからだよ。元氣を出さない……」
與里は大分時が過ぎてから、又蒲團から片腕を差し抜いて玄也の背中をさすりはじめた。そして、玄也の耳に口を當てるやうにして、靜かな聲で二言三言慰めの言葉を囁いた。それはまるで子守唄のやうであつた。

歌夫はひとり二階へ昇つた。

それから餘程過ぎて後、玄也は泣き疲れたのか悄然として昇つてきたが、まだ目を開いてゐる歌夫を認めて、「アアア、畜生！俺はいよいよ參つた……」

駄夫に向つて言ふともつかず、獨り言ともつかず呟いてゐるが、急に氣付いて疊の上へベツタリと坐つて、俯向き乍ら考へ込んでゐた。

「あん畜生め！早く賣り飛ばしてもして呉れりあ良かつた——」

すると又、

「俺ア今度こそ人間並みの生活がしたいと思つて、意氣込んでゐたんだのに。何から何までみんな當外れて滅茶々々になつてしまつた。もうみんなブツ壊されて、どうにもならねえ……」

併し駄夫はもう先刻から目を誤り相手にならうとしなないので、女也は睡て立ち上つて自分の寢床を敷いた。そして、それから時々、獨り言を洩してゐた。

九

それから數日して、駄夫は愈々竹藪の家を去ることになつた。横濱の、廣々と港の見える山上に住む一人の友が、暫く彼を泊めてあらう約束をしたので。

睡て午に近い頃、出勤の與里と二人、麗かな光を浴びて此の家に別れを告げた。竹藪はひっそりとして静やき

に満ち、その静寂の中に、睡て訪れようとする夏の感覺が、新緑の緑を忍ばせてゐた。家を出てて振り仰ぐと、その静寂な長屋自身も亦羅やきの中にあつた。

「本當に駄夫さんは行くのかわえ……」

總江は一寸淋しそうな様子をしてみたが、すぐ機嫌の良い笑ひを帯へ乍ら、道の上まで見送りに下りて來た。

そして、麗かな光に目を眩ませて顔を響め乍ら、このやうに晴れ渡る日、廣々と海を見晴らす横濱はどんなに壯快であらうかと駄夫を羨しがつた。老婆も亦總江と同じ處まで見送りに下りてきて、

「本當に長い間行届きませんこと——」

と鄭重に挨拶を述べた。この人に再會の機會は最早あるまいと、その思ひつき自身が一つの爽やかな風景のやうに、駄夫の額を靜かに流れた。女也はその朝も早くから外出して、この場所にはゐなかつた。

丁度二ヶ月——かれこれと一と春に近い間、ここに過ぎたわけであつた。

「見給へ。麥が、もうあんなに伸びきつてゐる……」
そして夥しい昆蟲が、道の上にも、葉の表にも、羅やいてゐた。
靜蒼とした靜の下から街の方角へ曲つて間もない所で

は、そこら一面の藪が百坪ばかり拓かれて、ヨイトマケ

が働きに來てゐた。この邊では、不吉の樹と言はれる無花果が、何本となく此の藪に散在し、バサバサとした葉に大きな光線を向けて、深い陰を落してゐた。夏も間近い田圃の風趣は、靜かな感情に溢れて見えるのであつた。

「ヨイトマケは不思議に懐しい思ひをそそのめるものだね。あれは甚だ家庭的な勤勞だよ。少うし此處で休んで眺めて行かないか……」

與里は駄夫を促して、路傍の雜草の上へ腰を下した。

長々と折れ曲つた膝を抱くやうにし、背中をまるめ、首を突き伸して爽やかな空を眺めてゐる。それは靜かに笛を吹く人々の顔であつた。さうして、何もせず、長い沈黙のうち、緩やかな晝が動いて行つた。

「ヨイトマケの女達は皆それぞれに訛があつて、其唄は良く聞きとれない。時々二人を讀み込むと見えて、唄の合ひ間に、圓く圍んだ全ての顔が、笑ひ乍ら彼等の方を振向く。單調な唄が續いてゐる間は、全ての綱は物憂げに弛んで、蒼空の中で遊ぶやうに思はれた。そして短い一瞬間だけ、キリキリと引き張られる全ての綱綱によつて、ギゴチない様をした心棒はわりに壯快に昇つて行く。白日の下に、至ては至極悠長であつた。

「この邊も、だんだん街になるね——」

彼等は歩き出した。駄夫は手製の杖を打ち振つてゐた。それは靜かな道を通る時には、それ自身が彼の身體であるやうに、生々と思案してゐるやうであつた。

「兄さんも愈々發狂するんぢやないかね。野越家の最後の發狂だね。これで丁度、僕の家族は完全に氣違ひ揃ひになるわけだよ。愛嬌のある一家族だね。」

「あの人は大丈夫だと僕は思ふが——」

「危いね。人相もすつかり變つてゐるし、この四五日は動作も始終そわそわして、身體全體が落付かないやうだから。僕自身、又、いつ再發するか馴れやしないし……」

與里はクツクツと軋む笑ひを鳴らした。それは過りの靜かな道と長く調和して、眞晝の深い睡むたさを強めるやうに感じられた。

道は次第に賑やかな街へ還入つて行つた。彼等は與里の勤めてゐる活動小屋の前で別れることに約束してゐた。其處にはまだ見世物の景色らしい特別な雜沓は見られなくて、ただ薄汚い數本の轎だけが立ち並んでゐた。

「又、訪ねてくれたまへ」

別れる場所へ來て、與里は駄夫の手を握り、さう言つた。近頃よく泣ける與里は、もはや涙をためてゐた。併

し言葉は蒼空のやうに爽やかに元気が良かった。

「ああ。いづれ又、きつと訪ねるよ」

「しかしね——」

與里は静かな笑顔を作つて、

「併しね。君にもう會へないやうな気がするよ。いや、君にもう再會の機會はあるまいと無理に思ひ込まうと僕はそのやうだ。全く無意識のうち、僕はさう信じようとしてゐるのだね。僕はさういふ風に自分をわざと淋しからせ乍ら、その寂しさによつて、さうして、その淋しさを慰めることによつて、生き甲斐を見付け出さうとするらしい。つまり自分を淋しがらせることに由つて、一層強く生きる執着を燃やさうとするらしいね。では——」

與里は、もう一度駄夫の手を強く握つて、

「では、もう君に會へないね……」

「ああ、君の健康を祈る——」

互に手を放し合ふと、與里は急にカラカラと爽やかな音を鳴らして哄笑し乍ら、

「君。きつと又訪ねて来て呉れ給へね」

「きつと——」

與里は髪れた笑顔と共に簡単な一體を脱し、直ぐ振向いてスタスタと、看板や轆等のゴタゴタした小屋の方へ

歩き去つた。

駄夫も亦自分の道へ向き直り、杖を緩やかに振り廻し乍ら歩いて行つた。餘程歩いてのち、もう一度念のため振向いてみたら、矢張り與里も、薄汚い轆のヒラヒラする下で、遠い雲でも眺めるやうに、駄夫の姿を見送つてゐた。

駄夫が高々と杖を振り上げたら、その人像も瘦せた腕を差し上げて、帽子を靜かに、左右に打ち振つてゐた。

昭和二十二年七月二十日印刷
昭和二十二年七月二十五日發行

〔いのちがけ〕

定價金四十五圓

著者

坂口安吾

發行者

東京都中央区日本橋通三丁目八番地
木呂子 鬼斗次

東京都文京區久堅町一〇八番地

共同印刷株式會社

印刷者

大橋芳雄

東京都中央区日本橋通三丁目八番地

發行所

株式會社 春陽堂

(會員番號A一一九〇三三)

電話 五一・四三七三
日本橋 四八四八・四八四九

振替東京一六一七番

(配給元)

東京都千代田區神田淡路町二丁目九

日本出版配給株式會社

1E/A-86



終

